１９２５年（大正14年）〔21歳〕
「辰雄日誌１９２５」No. 7　（2）
――１９２５年７月１～31日――

小池辰雄

○１９２５年７月１日（水）

雨。夏の半ばともなるのに、雨が降ったりして春か秋の様に涼しい。あと十日で夏休みが来るとは思われない。また試験が近いのに試験が来るとも思われない。至極、平常通りの気分で、第一にやりたいことは宗教書を読んだり、英独の勉強をしたいことである。元気よく敏活に読書。それは野心のためでなく、純なる「ウァーク・ハード」〔勤勉〕の心にかられて「フォーァ・ゴッド」〔神のため〕なる故に。

西洋史で Oliver Cromwell〔オリバー・クロムエル〕が出てきた。彼の名をノートに記するときに、僕は１９２３年の春、彼の伝を読んだことを憶い出し、厳粛たる何者かに攫(つかま)えられるの感がした。彼が軍歌のかわりに讃美歌を用いたること聞くに及んで、笑うものが多かった。僕のみは「然り！」と彼のために応えた（心の中にて）。知らざるか友等よ。我にとりては最も懐かしき友の一人なるなり。

○１９２５年７月２日（木）

晴、雨、晴。母上様の御病気を伺い、祈りと御手紙。而して御声はいと大なり、確かなり。感謝なりき。

「神は艱難者(なやめるもの)を艱難(なやみ)によりて救い給う」（ヨブ記36・15）

○１９２５年７月３日（金）

晴、驟雨(しゅうう)。かつておかせる不節制の大罪、我が胸中に深刻に残れり。誠に

「何を食(くら)い、何を飲まんと思い煩うことなかれ」

は強き誡めである。今日に至りて誠に有難く言うことが出来る。我、最早、悪魔の子に非ざるなり。我、律法に対して無力なり、死なり。誠に之、神に依りて生きんためなり。我、神と共に在りて永遠に。誠に彼等貪欲の輩(やから)は我が最も悪(にく)むところのものなり。

道はいかにもあれ、すべては我にはたらきて善なりき。善なり。善なるべきことを確信して平安身に溢る。パウロ、最大のキリストの敵たるパウロ、最愛のキリストの僕となる。僕の小さい経験を以てしても、このことの誠に大なる神の恩恵にして奇蹟にして疑うべからざる事実、真理なることを痛感する。

〇1925年7月4日（土）

晴、夕立。人よ、我が傍らにて金のことを話さないでくれ。我が耳はいたむ。人よ、そは汝等自身をけがし、堕するものなるを知らざるや。品性下劣な人々よ、彼等が！その人々なるを見る我は、すでに瀰漫（びまん）している金の虫の害にいかにおそるべき、憂うべきかを知る。我に真の歓喜を斎（もた）らす何ものがわが外界にあるか。そうだ！と心から感じ、よろこぶべきもの見聞しない。神のことを本当に讃美して感謝して話すひと、一人だになし。さらば知らず、汝等すべて悪魔の子よ。我何の関わりあらんや。さはいえど、我が内なるものは、汝等をただ敵として見るにたえず、我がうちなるものは、厭世（えんせい）するにはあまりに汝等のために悼（いた）み、愛す。

誠意のない人はかわいそうだ。さもしい心の人はかわいそうだ。小計を弄する人はかわいそうだ。僕の目にはよく映ずる、僕は出来るだけこれ等の人に対して忍んで、キリストの愛を以て対したい。

午後9時のお祈りに。最愛の母上のために、北京に召されし兄上のために、愛する高島の伯母様のために、愛する武田の叔母様のために、恩師内村先生のために、恩師藤井先生のために、恩師畔上先生のために、悪魔の言行を見せてくれる人々のために。救主イエス・キリストの御名に依りて祈り奉るのである。

〇1925年7月5日（日）

ルッター研究誌第3号（発展号）来る！　歓びの最大（イトモダイ）なるものの一つ。佐藤先生の如く、「聖書と研究と祈り」の中に僕もこの夏を過ごしたいものである。それには独りが一番である。兄上の最後にとどまりし地、沼津へ行こうと思う。希望の深大なるものがある。講習会はやめよう。人間がこせつくとつまらない。富士がある。何といいところではないか。しからずんば、東京で藤井先生の御指導を仰ぎつつ。

〇1925年7月6日（月）

晴。主、共に在（い）ます。我乏しきことあらず。我強し。我安し。昨日の午前は聖日を遵（まも）って送った。誠に悲しいかな、僕は午後から試験の準備をせざるを得なかった。それは本当につらいことであった。今日の成績が悪くても遵（まも）らなければならなかったかも知れない。しかし午前だけでゆるして戴いた。

試験の成績はどうでもいいことである。怠けてさえいなければ結果はいい。それで落第の心配は毫もないはず。席を争うの賤しい考えはない。カンニングをする奴はしろ。我は関せずなりである。ただ汝等がかわいそうなばかりである。小さく、つまらなくするものは自分自身であることを汝等は知らない。

奇麗な白いダリアが机の上に置かれてある。勉強するときにこれほどやさしい友達はな

い。主キリストの祈祷の名画がルッターのかわりに入った。9時のお祈りのときは、僕を導いて天の父に祈ってくださる。囚人となったパウロの受難の額は、僕を厳粛にしてくれる。試験なんか超越して、相変わらず感謝の日である。試験の日も、何の日も、すべての日は、基督者には神によりて歩みつつあるべき日なるに於て毫も変わりはない。

○1925年7月7日（火）

晴。疑うものは疑え。我は神に疑われる如きことをせざるなり。一体、僕くらい小兒らしい人間はそう多くは居ないらしい。少なくも僕のクラスで最も小兒らしいのは僕だろう。友の見るところ疑いなくそうである。しかしまた僕くらい事の真を洞察する眼のあるものも僕の級には居ないらしい。これは、うぬぼれでもなんでもない。慧眼を天性戴いているのである。外観、無考（カンガエナシ）の無邪気なわからずやに見えて、その実「蛇の如く慧い」というものであろうか。それは所謂慧いのではない。最もよき眼、それは人の眼でない眼が、僕が内心厳粛になったときに与えられて、これによって見るときにあやまることはない。僕の信仰を見てくれる友は一人も居ない。それほどまでに外観と内心とはちがう。敢えて友達と遠ざかって、遠大な思想を抱いて黙々としていることは僕に出来ない。彼等と共に笑い語る。しかれども一度事、不浄不義虚偽のことに触れんか、今まで小兒の如く無邪気なりし僕は厳然とせざるを得なくなる。彼等はこれをあやしむ。僕を解し得ない。味方と思いし僕は急に敵となる。「ピューリタン」だの「神学者」だのとからかうものが居るが、神学者でもピューリタンでもない。ただ、神の子であるばかりである。キリストを受けたる罪人たるばかりである。パウロ、ルッターを最大の友とするものたるばかりである。

基督教を研究するものがちょいちょい見える様である。彼等は第一歩を誤っている。学究的であるということだけで既に彼等はふみちがっている。信仰を根本とせざるくらいなら、基督教を云々することをやめてもらいたい。基督教の害虫である。害虫の多い世の中である。

○1925年7月8日（水）

晴。試験第3日目。英語だけ。英語は面白いのでよく読んであるため、楽々と出来た。1時間半のところを25分で出したのは気持がよかった。第1日は漢文と歴史と修身。中出来。第2日は論理と小牧先生の独乙語とグンデルト先生の独乙語。論理は脱線の傾向あり。しかし思う存分書いて面白かった。独乙語はトップを切って出した。ただし名誉でもなんでもない。自分の力を自力でためしたまでである。

松濤がきて1時間半ほど「宗教と人生」を論じた。二人は、実生活と宗教の密接なるべきこと。正義、誠実の根本的に必要なるべきこと等で一致した。しかし彼は釈迦に傾き、我は基督を受けるに於て根本的相違があった。このことについて二人は語らなかった。若

し僕が信仰に厳然として起たんか、彼と相容れざる点はあらんも、二人が誠の一念に真剣になる点に於て一致したるが故に、よき会談であった。僕の友としての（同窓生）第一人にして最後の一人である。なまじっかな基督者や、哲学研究者よりはるかに愛すべき友である。富山と松濤が今の友であろう。二人の心は深き者に向かって呼びつつあった。ただ願う、祈る、彼の終に基督によって救われんことを。若し彼が釈迦によって、然り！と云い、後に基督によって然り！と言うことありとせば、彼はいずれに真の然り！叫ぶや。罪と霊魂に対して最も切実ならば彼は後者に於て涙を流すだろう。

○1925年7月9日（木）

晴。哲学と山田先生の独乙語（トップを切る）。哲学は中出来だった。惜しむらくは読み方が足りなかった。西洋古代中世哲学史と学校のノートを夏、読んでやる。癪である。こんなことでは駄目である。

Logosidee〔ロゴス観〕，Mesiasidee〔メシア観〕の研究は面白いであろう。明日は経済と国語。それで終りである。来れば存外早く逝く。辛くはあるが、僕の試験に対する心地、態度は一変しているから何にも動揺不快を感じない。与えられたもの、課せられたものに忠実でなくてはならぬ。小さなことだが、こんな試験にあやしいことをする奴は、やはり人生の大事に於てもおもわぬ嘆きに泣くものであろう。その嘆きはとりかえせない。それは万事の終るとき、判（さば）きを受くるのときである。

この夏の希望は大である。主として読書の事である。勿論それより大なる一事はある。今の僕に於て論を俟たざる事である。成るべく孤独でありたい。大切な夏である。本当に大切である。こんな大切な夏は今までになかった。ルッターの勇気を以て貫かん決心である。

○1925年7月10日（金）

雨。試験終る。経済失敗。とうとう赤丸か青丸かをもらった。国語は之が取り返しをした。有終の美は最後の国語でなしたが、経済の失敗は癪（しゃく）でたまらない。問題が相当むずかしいのと僕の油断とでこの実を結んだわけである。あらそわれぬ結果と思い、我が心のゆるみに対して神様におわびした。試験は問題でない。点も勿論。ただ心のゆるみをのみ悲しんだ。

松濤と共にグンデルト先生を訪問した。これが嗃矢（こうし）である。約2時間ほどお邪魔した。先生はよく推しはかってくださるので、Gebrochens Deutsche Sprache〔破れたドイツ語会話〕でも解いてくださる。なにしろモズモズして困った。Gesangbuch〔讃美歌集〕をこの夏中、借して下さった。話は基督教にもおよんだが、またルッターにも及んだが、信仰の熱烈なるを先生の中にうかがい得なくて残念な様に思った。先生はあまり頭に走っていらっしゃるのでないかと思われた。

しかし、そのために先生をどうこう思いたくない。先生の熱心にただ敬服したい。勤勉

にただ敬服したい。ただ先生にキリストに対する純なる信仰の燃えていない様な風に見えるのが僕にとってはやはり耐え難き嘆きの様でもある。ケーベル先生を僕は不幸にして知らないが、先生の人格はキリストの香がありはしなかったか。グンデルト先生、如何に知能に秀でて居られても、冷静なる哲学的判断を有し居らるるとも、人の真の霊を動かすものは竟にかかるものでないこと、そして先生の御人格もかかるものによって美わしくはならないことを知ってくださらないだろうか、行ってくださらないだろうか。

先生のあの学研がルッターの信仰の上になされ、ルッターの信仰がその根本ならば、いかに先生は懐かしき方となることだろうか。僕は云いすぎたかも知れないが、どうもこれは実感である様である。しかし、それはそれとして、先生に対する敬愛の念を害してはいけないと思う。

この夏は、カント独逸語の勉強をして先生を驚かしてやろう。僕の胸は信仰の火と勤勉の火で燃えている。神よ、願わくは、この身の御用のおわらんときまで常にかくあらしめ給え。アーメン。

○1925年7月11日（土）

雨。夏休みの第1日である。梅雨期の如く雨が降る。午前、富山茂のところを訪問した。2時間の快談。信仰の友のみ我が友であると思った。午後から四郎ちゃん、泰ちゃん来らる。転宅の準備で一日無為。

信仰と勉強に燃やされている僕として今の環境は面白くない。はやく独りになりたい。これは大切なことであると思う。雨やその他の関係で延びる。何日転宅かわからない。親類関係というものも面白くないものである。しかし、世の中と思えば、何でもなくなる。世の中である。思索の世ではない。関係の世である。そこを信仰によりて歩み行くべき世の中である。万事を任せ奉る。僕の御用の果たされん日まで。知らず人の心は何処へ過ぎ行くかを。知る、我々真にパウロ、ルーテルを慕うものは神の道へと進まんことをのみ。読書せざるは甚だ心地よきことでない。

今より（11時より）すこし読む。この夏は大切である。僕の道は異う。最早今までの辰雄でない。中学時代の辰雄でない。高等学校3年からの辰雄は神によりてその道を選ばれたる辰雄である。それは凡人の道ではない。それは聖人の道でもない。それは信仰の人の道である。我が使命の故に、時間の徒費は罪悪である。神よ、願わくは、不断の勤勉をなすの信仰の力をあたえ給え。我、努力に依らず、信仰の故に燃えてなすなり。

○1925年7月12日（日）

雨。この日は『聖書の研究』300号感謝会のありし日。

汝が今日享けつつある聖霊は確かに何よりも貴きものである。世と歩調を合わせんため

に聖霊を忘るることあらば、その罪は死を致すものである。世の人の心に合わざることが罪ならば、いくらでも罪を犯せ！　どんなことがあっても基督に信頼することを止めてはならぬ。楽園を望む。しかしこの世は楽園を与えぬ。罪と死との世には我は苦しまざるを得ず。進んでに非ず、余儀なくされて、而も最も深刻に罪と死とを睨んで起(た)たんとす。

年正に22、我が敬愛する友ルッターは丁度今、このとき聖霊に感じた。22才のルッターを偲び、今の私を見て、私は非常に力強き友を私の内に見る。

本当に僕の生涯のクリスィス〔κρισις、裁き〕である。Wendepunkt〔転換点、変わり目〕である。今を措いて他に時は無いのである。本当に今である。僕の環境の人はいかに赴き行くとも、僕のみは別の道を行かねばならない。

ルッターが父の心にも逆らって決然として起ちたる如く、僕もすべての親戚知友を顧みず決然として起たねばならない。之は実に実に確かな善なることである。これを断行せずんば、僕は基督を棄てたものである。叛逆者である。後に結ぶ果を僕の周囲の人はすべて知らない。しかし、神の聖霊に感じている僕には、明々白々な事実として見える。その果は神が約束し給うものなるが故に、これほど確実なものはないのである。僕は信仰によりてのみこれを真となす。そしてそれは既成の事実の様に確かである。信仰によりて断行する。ただこれのみがとり得る道である。

20世紀の空には日本の上に輝星(きらぼし)が輝かねばならぬ。そしてその先駆の星が既に19世紀に現われている。内村先生、藤井先生、畔上先生、佐藤先生等、信仰の火に燃ゆる輝星である。これ等はパウロやルッターの如き光と全然同色の光である。パウロ、ルッターの光を受けて輝き始めたのである。その根本の光の源泉の光は即ち、ベツレヘムに現われたる聖なる光である。かくも輝き始めたる少数の光の後に必ずそれが実を結ぶ大なる光が光らねばならない。その光は時代が真の闇黒に閉ざさるるの時、機の正に熟せる時にあたって燦然(さんぜん)と放たれるに相違ない。その時来らばベツレヘムの星を一斉に我等は讃えよう。そして、内村、藤井、畔上、佐藤先生等にも深く感謝しよう。それは我々を「彼」に導いてくださったからである。

私は預言する。第20世紀中葉に輝星の一団が日本に現われ、輝き、末葉遠からずして一大変動が世界に起こらざればやまざることを。

この一団の星の先駆は内村先生、そのいと小さき一星は私であらねばならぬ。この罪人愚鈍の虫けらもかく選ばれたる上は、全霊を主の御名のためにのみ。アーメン。

信仰の烈火は死ぬまで燃える。と云うのが私の最愛の句でなくてはならぬ。夢でも幻でもなんでもない。「知る人ぞ知る」である。私は信仰に生きる。熱愛す、世を。深き睥睨(へいげい)の眼の底から。十字架に従わん、私も負いて。ただこれだけが私のなし得る最大のことである。そして全部である。この外に何もなしてはならぬ。

栄光、神に在れ。アーメン。（安息日午前）

聖安息日の午前、周囲の人々に失礼して独り書斎にて、はるか、藤井先生と共に今日もする。これが若し出来ない様なことでは本当に悲しい。安息日にさえ、神をおもわないものは誰であるか。知らず。我々はかくしては生きて居られないのである。生ける神が呼び給う。故に我々は聖なる時をいただかざらんとしても決して能わざるのである。

夜、三弦さん、四郎ちゃん、泰ちゃんと4人でトランプをなし、11、5、-5、-11のクルース・ゲイムで第2番だった。久しぶりで面白く遊んだ。今日、雨中を遠く足を運んだ、栗林久子さん(女中)が気の毒だった。よく働いてくれた。僕たちはそれを知らずに居た。手伝ってやればよかった。千鶴代さんも働かれた。転居が色々の事の齟齬（そご）と天候の悪いのとで延期となった。かくなった以上、僕はこっちで少し勉強しよう。

信仰なき人の心は動いている。衣、食、住のことで動いている。僕は真っ直ぐに進もう。勇敢に進もう。それは毎晩9時の祈りのときに、兄上政美や高島伯母様がよく僕に告げて下さる。二人は天にて我々の小さき動揺をみて、いつも僕に、しっかり！　と云われる。

○1925年7月13日（月）

曇、やや寒し。午前、転居先へ畳乾しに行く。午後それをかたづけに行く。あとは遊び相手で何もせず。今、自分の室におちつくのが午後10時。

神様、私はいかなる聖旨だか知りません。私はこれから2時間、静かなときをいただいて読書したくあります。すべての事の齟齬や渋滞や天候不良により、かくの如き有様です。私は人々の心を知りません。彼等が不信であることだけを知っています。私は私の道を歩みます。私はすべての事情に甘んじて自分の道を開いて行きます。神様はいかなる困難も必ず之に耐えるの道を備えておき給います。故に、私は乏しきことなく、つらきことなくあります。

昨夜、東京の龍二兄上に御手紙を差し上げて（午後12時）、僕の決心を申し上げた。まことに僕は人の思いよらざる道を行くことになるでしょう。僕はあくまで神と神の人と共に歩みます。

燃ゆる信仰！　熱する労働！　我が全霊全身は是。神よ、願わくは我をあわれみ給え。

○1925年7月14日（火）

晴。漸（ようや）く天候本復。今日も昨日の通り転居の準備で、往復すること2回。乳母車を、水高の帽子をかぶりながら引き歩くは奇観である。大きな瓶や本や諸道具がのせられてある。畳のあげおろし、その他色々のことをやる。是もErfahrung〔経験〕の一つと思っていさぎよくやった。やるからには、小僧と同じに働く全然労働者の気分で。それでなくては人間は駄目だ。とにかく今度の転居の愚はよく知れたことだが、もう何もその醜態について言いたくない。ただ僕は人間らしく、はたらきたいばかりで、神に仕える気持で外形の愚を

おもわずに仕えたいばかりだ。基督者の貴いところはそこにある。人の真似のできないところもそこにある。愚馬々々しい様であるが、決してそうでない。愚かに見えるが、返って愚かと思う人の方が愚かである。基督者には人が気狂(キチガイ)じみて見えることも出来れば、馬鹿らしいこと、子供気たことも何の苦もなく、否、かえって本当の貴さというものを味わいつつ、よろこんで出来るのである。俗人の心には解せない。ニセ基督者にもわからない。ただ神を仰ぎ、生けるキリストを信ずる者のみ能う。言うことすること、僕の眼より見て、僕に然り！と云わせ得るものは全くない。周囲の人は空の人。こうなってくると彼等が何だのかだのと、小計をめぐらしているのがかわいそうでたまらなくなる。僕は実に辛辣(しんらつ)の様だが、彼等の言、動を虚、空、虚栄、貪婪(どんらん)などを以て一括して言い去りたくなってしまう。彼等が僕に然りと云わせ得るときは、彼等が本当に本心に立ちかえって誠心から言動する、まれなる場合にすぎない。

僕は罪の塊ではあるが最早、貪婪、虚栄は全然僕の敵となっている。若しこの罪を負わせ得るなら負わせて見ろと言いたくなる。善に進むに最も熱心なるだけは確かである。僕は段々、人と合わなくなって来る様である。どうも仕方がない。それに反して段々、クロムエルのPure〔純〕に近づき行く様である。僕は何を敵としても、Cromwellにきらわれる様な人間になりたくない。

しかし、どこまでも世の人を愛す。これもまた確かである。世を憎み、世を愛す。大なる矛盾である。この矛盾の矛盾ならざるは、知る人ぞ知る。神を仰ぎ、キリスト彼御自身を信ずる人ぞ知る。アーメン。夏の夜の群星、天に輝々として輝く。

○1925年7月15日（水）

晴。長兄政美、僕をキリストに導きし兄上の誕生日第31回。

美わしき生涯、１８９５年7月15日～１９２１年9月22日、雄々しかりし生涯。

兄上よ、懐かしの星々輝き渡る。昔を偲ぶこと切なり。

兄、我にあり。我、兄にあり。

神様、兄はかくも速く召されしや。その聖旨我知らず。

しかれども、唯一事は之を知る。否、信ず。

神に深き聖旨あり、あやまりたまわず。

我残されたり、我残されてあり、ここに。

地上に、而も兄の何ものかが宿りつつ。

兄上よ、天にて祈り給え、感謝し給え、讃美し給え。

而して時の到るを待ち給え。

我はあやまることなく、兄上と手を握り、眼と眼とを見合わせて、歓び、感謝し、讃美するを得ん。

その時よ、その時よ、ああその時まで。

今日、転宅をなす。終日の筋肉労働、実に味その中にありて愉快であった。僕の働いたことを謝するけれども、僕がかえって働かせて戴いたことを謝したくなった。夕方、兄上の日でもあるので、バナナをうんと買って皆に供した。しかし兄上の誕生日と云って回想してくださる人は居なかった。ただ僕が買って来たとばかり思っていたらしい。逝ける兄上の誕生日を祝す僕の心を知ってくれる人はどこにも居ない。それでもいい。僕は嬉しかった。感慨無量なるものがあった。夜は更けて行った。皆も疲れて寝しずまった。

僕は静かに考えざるを得なかった。聖書を読まざるを得なかった。コリント前書15章と後書5章とをしずかに読んで、言われざる涙と歓喜、希望に我が全心は神のものであった。どうしてこんなに、貴いものがいただけるのかと不思議であった。神の御業なる故に不思議である。しかして、大なる恩恵である。かかる境地のあることを世の人々に知らしめたい。前人稀に踏むの聖境である。基督者の純なるもののみ踏み入り得る聖境である。僕もそこまで入り得る。それは神、我が内に宿るときのみ然りである。三位一体の神とは実験によらなければ到底解し得られない。罪に泣かなければ解し得られない。アーメン。

アンタレス星を望みて、我もまたアンタレスなるを感じた。

○1925年7月16日（木）

晴。転居は昨日を以て完了し、とにかく落ちついた気持で、今日は、逃げる様であったが、昨夜、神様とのお談（はな）しで帰ることにきまり、人の感情をすてて、今日帰ることとした。四郎君、泰彦君と共に10時の汽車で帰京。車中ややありし。『宗教と科学』を読む。

吉原の貞ちゃん、敬（ヒロシ）さん、礼ちゃん、叔母様が居られた。貞ちゃんも敬さんも殆ど御全快で嬉しく感じた。御見舞を上げなかったのは誠に悪かったと思った。祈りにのぼったことは確かであった。その中に、津田沼へお引上げとのこと。お目出度くある。先ず健康第一として是等の人々に言わねばならぬ。親類間の不円満なきにあらず。厳格に言えば大いに有り。すべてに超然たるは僕の道。その解決は神に俟つ。神に依りたのまざる輩は如何に思っても僕には何にもひびかぬ。ただ彼等が可愛そうなばかりである。もう、憤慨の言もくりかえすまい。自分には大切な仕事が沢山ある。これをなせばそれで何をしなくてもいい。何を模してもいい。

○1925年7月17日（金）

晴。すこし夏らしくなって来た。相当暑い。午前、向山堂へ行き、中山昌樹訳、ダンテ『新生』、『神曲』（天国、煉獄、地獄）の第1、2、3、4巻の4冊を買った。内村先生『ヨブ記講演』を買った。『聖書の研究』300号を買った。何を買うより嬉しかった。良書が沢山ある。何ぞ外のクダラヌ本を買ったり読んだりに金や時があろうか。

『聖書の研究』7月号（300号）についての感想は無量である。ただ、日本国の将来のために祈ると共に自分の将来のために祈るばかりである。内村先生！　この4字に言い難きの深刻、厳粛なる響きが宿っている。『聖書の研究』この5字に絶大の内容と抱負が蔵せられている。内村先生がその巻末に、

「余は斯くして殆ど二十年、毎月市ヶ谷まで通った。雪の日も、花の期も、市ヶ谷停車場に下車し、左内坂を上り、加賀町の窪地に建てられたる印刷所に通った。余は多くの美わしき思想を此の道中に於て得た。幾度か市ヶ谷八幡境内の断崖の上に立ちて独り静かなる祈祷を神に捧げた。余の証者たる生涯に於て最も恵まれたる実験であった。」

を読んで、よく通る左内坂の土、先生の足跡を印してあるかと思って、急に懐かしく思われた。深刻な面持ちを以て先生がかたく踏みしめられた左内坂は、僕にとって忘れられぬものとなるだろう。『聖書の研究』誌読者で最も左内坂、秀英舎〔大日本印刷の前身〕に近く住んでいるのは僕かも知れない。秀英舎のあの機械の音の中に、『聖書の研究』の印せらるるときがあるかと思って、その音が懐かしくある。今まで知らざるにあらざりしかど、今日、とくにかく感じた。内村先生から、堅忍（けんにん）の2字を学ぶ。この2字は如何に僕の生涯に影響を及ぼすかは後の日に解るであろう。

午後、西荻窪の分譲地を見に行った。いいところである。井ノ頭の森、武蔵野の原、富士の遠望、東京市内とは別天地の感がある。ただ電車の音がすこし耳ざわりかも知れないが、それは已むを得ないことであろう。10分毎に一過するのを聞くわけである。帰りに山本へ遊びに行く。義雄さん、隆さん、富美ちゃん、皆久しぶりでよろこんで僕をむかえた。無邪気な友達である。本当に罪のないものである。彼等に智慧のついて行くことをなげく。天真爛漫を失い行くをなげく。わざわいなる教育なる哉。8時すこし前には皆で入浴した。それから、皆は寝た。僕は9時、お暇（いとま）した。10時、帰宅した。

○1925年7月18日（土）

勉強をしようとすれば、用がある。しかし用は大切である。親の命令なるが故に、我は果たさん。しかして勉強をせん。そこに奮闘の精神が湧く。有難いことである。人生は、思うがままに行くときに、ロクなものにならない。人生は、神の聖旨に従いつつ行くときに光を生ず。

午前、丸善にてSchiller, Wilhelm Tell〔シラーのウィルヘルム・テル〕を買った。お使いも一寸した。お昼は、山本の兄に御馳走になった。「土用の鰻」とかいうことである。精力が出た様に感じた。松屋呉服店を初めてのぞいて見た。夜は神楽坂へ散歩に行った。都会人は暑い暑いと言いながら、人ごみを好む。迷える心である。虚栄、虚飾の中毒の人間ばっかりだから当然の結果である。用があればこそ一寸散歩に行ったので、誰がぶらぶら神楽坂へなんか行くものか。不愉快でたまらない。それを晴らすために、物干へのぼって、し

ずかに天を仰いで星を望んだ。20分ほどして、僕はすっかり天と親しんで落ちついて下りて来た。何としても、僕は近代人の嗜好とは合わない。原始人のそれと合う。金星の炯々たるは僕の心を如何に躍らせただろう。

今日、吉原の皆様御全快で津田沼へ引き上げた。実に嬉しく感じた。自分の病気がなおった様に。一時は生命もあやぶまれた模様。にこにこ顔で帰られるのを見ては、涙がでそうであった。神は彼をたすけ給うた。彼は幸である。彼は神に謝せねばならぬ。「お蔭様で」と云う語は、人に対して云うときに意味がない。なぜ、神様に「お蔭様で」と云って感謝しないか。

○1925年7月19日（日）

午前9時20分前に出た。左内坂を通るときに内村先生を思った。電車が折よく来た。渋谷で下車したのは9時15分頃であった。省線〔「省線電車」の略、国電、JR〕は早くて気持がよい。玉川電車を駒沢新町で下りたのは10時20分前であった。お集まりは10時半であるから優に30分は早くある。しかし、先生のお宅へと足をはこんだ。10時15分前には着いてしまった。うかがえば、今日はお集まりはないとのこと。9月までお休みとのこと。

お二階へ通された。先生は書いて居られた。お話しは僕の問題にうつった。文科か法科か。僕は先生の御意見うかがった。先生は、自分は法科を選んだが若し、今自分をして選ばしめるならば文科を選ぶと言われた。法科をやったこと必ずしも後悔はしないが（益したことはなかなかあったが）、高等学校、大学の大切な時機を法学（所謂）のために用うるよりも、真剣に聖書、カント哲学、プラトー哲学、ミルトン、ダンテ等の研究をなす方がはるかに勝れりとすと云われた。

モーゼ律の美しき精神をはなれたる法学は、実にくだらぬものであると云われた。現代の法律学者は先生の眼には、更に言えば神の眼にはゼロである。僕の性質が法科に向かないことと、僕の近頃の霊感とにより、僕の心は文科に向かわざるを得ない。先生のお話は簡潔であるが、実に力強く僕にひびいた。それは、他の甘言、千人の助言よりもほかに力強くあった。それは神によりて動かされたる言であったからである。昨年のクリスマスの晩の内村先生のお話と、今日の藤井先生のお話とで僕は決然、文科へと思う。それは文学のための文科へではない。人霊のためへの文科へである。自分を犠牲にして神のため、キリストのため、人類愛のための文科へである。僕が文科へ！　これを聞いて、母も兄も親戚の人々も朋友も旧き中学の先生方も驚かれることであろう。文科へ、独文科へ。それは僕自身にとってもあまりに意外である。

意外、しかし、これが神の指し示される道たる以上、万艱と戦って僕は起つ。苦しい。苦しいことは僕の道には当然の事である。人のために己れが楽をして出来たためしはない。文才のない僕、怠けものなりし僕が、勤勉なる読書、研究を要する文科。それは余りに合

わない道ではないか。しかし、それよりも、己れが平凡に楽な生涯をおくらんことはなお合わないことである。

藤井先生は言われた。自己を犠牲にして一生を神のため、人のために送る生涯と、自己の私欲を満足せしめて送る生涯と何れが貴い生涯であるか。真の基督者は、深海の如く、深は動かざる断乎たるところ、平安の静けさがあるが、海面は波濤重畳と云う様で、艱難、煩懊（はんおう）、あらゆるものが荒れ狂っている、と。然り、彼は深く深く人の知れざるところに大なる平和、感謝、希望を蔵するが故に、いかなる艱難ものともしないのである。僕は、学力実に乏しいものである。一大奮闘、万全の努力を要する。如何に前途は暗澹（あんたん）として希望の光は見えざるとも、僕は確実なる一大光明の必ず前途に存在するを確信する故に進む。前進する。猛進する。失敗も、蹉跌（さてつ）も何かは、すべてに打ち勝って、我は進まんのみ。真剣、堅忍、真勇、是は我が武器なり。信仰は、この武器を握る雄々しき腕なり。聖霊は全心全霊に宿りて我を導かん。

先生のお祈り。藤井先生は、僕が先生のお室を去らんとしたときに、お祈りを捧げてくださった。未だかつて、かかるお祈りを僕一人のために捧げてくださった方があったか。僕は落涙せんばかりであった。藤井先生が今日、静けき聖日の午前に、僕のために厚き熱烈なるお祈りを捧げてくださった。これに優りて僕の心にクヒ入ったものがあったか。僕にはアーメン、と云うよりほかに言がなかった。「有難うございました」と申し上げるより外に言を知らなかった。僕の胸は一杯であった。僕は起つ。どうしても起たねばならない。神様は僕の手を握り給う。僕は人の手から離れて神の手に依って起たねばならない。何としてもかくあらねばならない。

偉大なるものが僕をとらえた。

偉大なるこのものより偉大なものはない。

偉大なるこの御方、天のお父上様。

私は聖旨に従うより外に道を知りません。

渺（びょう）たる私の一生は全然之を聖旨のままになさしめ給え。私は肉体を与えられました。私はそのうちに肉体をとられます。お父様は、更に完全へと私を作り行き給います。私はその完全をのぞみつつこの肉体を受けている間は全力を尽くします。どうか、如何ほどの艱難をも下し給え。キリストの愛は更に大にしてこれらをすべて打ち負かし給います。

どうか神様、最純なる基督者の数に入れさしめ給え。一日は千年の如く、千年は一日の如し。神よ、日常の生活を全く信仰、信頼によらしめ給え。神には服従、人には独立の神の子たらしめ給え。純なる基督者たること。ああこれのみが神よ、我が願いでございます。神よ、また言う、神のよろこび給う子と、かくあらんことのみ。救主イエス・キリストの御名により聞しめし給え。アーメン。アーメン。夜、12時半。

〇１９２５年７月20日（月）

午前、書簡、小包、少しの読書にてすぎた。午後、午睡1時間半。3時すこし過ぎ、目白の白井様へ所用ありて行く。西島さんを久しぶりで訪問した。西荻窪のこと、大学文科のことなど質問して帰る。目白は昔の偲ばれる地、１９２３年の春が思われて懐かしくあった。夜、10時の汽車で帰省された佐久男さん、タカちゃんを飯田町駅に送る。非常なコミであった。富士登山者、アルプス登山者の群が多い。リュックサックが棚に行列している。登山者多く、盛んである。

ダンテの『新生』、ダンテの『神曲』を今日から読み始めた。毎日少しずつ堅実に、と思っている。来年の3月は帝大入学試験を受けなければならない。否、試験に合格せねばならない。しかし合格せんのみが目的ではないこと勿論であるが、とにかく、一大奮闘をしなければならない。今から堅実に築き上げて行こうと思う。これは実際重大なことである。高等学校の第3学年は重大な時機である。これを空費しては絶望かも知れぬ。しかりとて恐るるに及ばぬ、あわてる必要もない。唯、堅実にたたきあげること。これのみが重大なことである。すべてはこれに従いて実を結ぶであろう。

〇１９２５年７月21日（火）

今にして初めて言うことを得る。僕は信仰によりて健康を得たりと。内村先生の『宗教と現世』の信仰と健康を実際に解し得て誠に有難くある。人は何とでも言うだろう。しかし、僕にこの確信を与えられた。僕の内なる光の現われん日も近からん。願わくは、光、神の光、僕にありてはたらき給え。光は僕に非ず、神の光なり。故に光なり。その他一切は光にあらず。豈（あに）、健康のことならんや。汝何を食わんと思い煩うなかれが、幾分なりともわかって有難い。ことは小より出発する。

胃腸を害して健康を害するは、特別の理由なき限り罪の果である。僕は最も恥ずべき罪を犯した。しかも長年月。然れどもいつも思う。こんな醜悪の罪の底からも神様は僕を引き上げ給いしことを。その寛大なる恩恵は実に感謝にあまりある。罪の谷底より、信仰の高峯へ。神は偉なる哉。人生は不思議なる哉。神は愛なる哉。

〇１９２５年７月22日（水）

長兄の日。染井に墓参した。久しぶりで訪れて兄上も喜ばれたことだろう。しかし、僕には喜ぶより先に、僕の罪について泣かざるを得なかった。兄上に会うの顔がないからである。何故僕はもっとReiner Christ〔純粋な基督者〕になれないのか。Pure Christian〔純粋な基督者〕になれないか。僕はこれが悲しい。本当に悲しい。なぜもっと真剣に奮闘しないか。信頼の独立者になれないか。このために、兄の墓前に跪いて祈った。僕のために兄上も祈ってくださった。そして、僕自身、地上に残されたこの身に兄から、上から力が与えられた。

励まされて僕は染井を辞した。
龍二兄上が丹精された朝顔、百日草、カンナ等、ずんずん生びて行く。林町時代を思い出す。
僕も草花はすきで、水をやる。

〇１９２５年７月23日（木）

雨。藤井先生が言われた。高等学校、大学時代、人生の春、青春時代に於て、その向上、溌剌たる生気を濫用、誤用して空に帰せしめんか。竟にそれは絶望、再び救うあたわざるものとなってしまうと云っても、殆どあやまりではない。特別な神の聖旨によりて奇蹟的な恩恵に浴せざる限り、神の子となり得ないと。これは、青年たる僕を誡められるに最もよき有難き御言であった。この間の日曜のお談の一つ。
草花もその芽が萌え出づるときにくじかば、花も果も生じないのである。本当に先生の言われる通り、僕の現在ほど大切な時機はないのである。人類最大貴機、危機である。これを熟慮すれば如何に現在の一日と云うものの貴いかが測られる。
貴い日々、それを汝は如何に費やしているか。聖書を読んでいるか。独乙語、英語を勉強しているか。宗教書を読んでいるか。基督者生活を送っているか。祈りを捧げているか。怠っているとは言わない。しかし、真剣か、誠実か、着実か。かく問いては、否！と答えざるを得ざるを如何せん。何故にかく、汝は生ぬるくあるか、不徹底であるか。思わざる嘆きの時が来るであろう。汝、心せよ、心せよ。今にして、真に目覚めざらんか。全く汝は危うし。
神よ、神よ、願わくは、この無力に力と光とを与えたまえ。私は、力と光とを最も望むものでございます。アーメン。
Robert Browning!〔ロバート・ブランニング〕、Alfred Tennyson!〔アルフレッド・テニソン〕

〇１９２５年７月24日（金）

晴。この頃の僕の問題は唯一つである。曰く、
「如何にせば偉人たり得るか」
人は笑うだろう。ことに僕の学友がこれを聞けば、嘲笑するだろう。中学の2、3年生の空想の様なことを言っていると云うだろう。英雄崇拝の夢を見ていると。僕は何と言われようと、如何にこれが空想に見えようと、かまわない。僕の全心をなやます問題はただこれだけである。如何にせば成功せんかではない。如何にせば金が得られんかでもない。如何にせば幸福ならんかでもない。如何にせば偉人たり得るかである。弱志、弱肉の自分にとっては誠に馬鹿げたほどの空想、野心の様に見えよう。また実際そうかも知れない。しかし、僕の最も内なる、最も深き、最も熱心なる心の声は此く呼び、此く泣くのである。
偉人、それは最も慕わしき偉人となりたい。天下をとらないかも知れぬ、雄弁でないか

も知れぬ。所謂、大事業が出来ないかも知れぬ。しかしただ一事、己れの天職に最も忠実なる偉人。かかる偉人になりたい。かくれたる偉人でよろしい。人を対象としない。人によってどうこうと行動しない。ただ神のよろこび給う偉人となりたい。現在の日本の偉人はただ一人しか知らない。曰く、内村鑑三先生、彼一人である。如何に学問に卓越していても、人格の人に非ざる限り、偉人とは言われない。人のためには我を忘れる熱愛の人にあらざれば、偉人とは言えない。

偉人は第一に、敬神の人である。第二に、誠実の人である。第三に、勤勉の人である。偉人の三大性質はこれである。第一に従う性質として愛人の人である。自己を忘れて他人のために尽くす人である。第二の属性として、彼は旗幟鮮明、寸毫の蒙昧をゆるさざるの人である。廉潔な人である。第三の属性とし、彼は不撓不屈、堅忍の人である。着実なる人である。故に彼はよく大事案をなし得るのである。かのワシントンは如何に、リンカーンは如何に。リヴィングストーンは如何に、ウェスレーは如何に。ルッターは如何に、ナイティンゲールは如何に。ブース大将は如何に、カーライルは如何に。その他、懐かしき詩人の数々。敬神と誠実と勤勉と、僕のありたいことは、この三つでありたいことである。

ああ、多くの――神の喜び給う――星々よ、美わしの星々よ、私もやがてその数に入りたい。どうか懐かしの星々よ、私をこの地上の生涯に於て導いてくれよ。そして私をその日が来らば呼んでくれよ。私にこれに勝る希望はない。私はその、神の、天の父の愛の大家庭の一人となりたいばかりである。

神の大家庭には、知られたる、知られざる真基督者が待っている。その中には、高島の伯母様が居られる。藤井のぶ子様が居られる。兄上が居られる。岩瀬一民様が居られる。

John Wesley が決然として立ちたるが22才の時である。彼は、本当に勤勉であった。その日課を見てもよくわかる。僕の最も学ぶべきは勤勉である。勤勉も竟にその根本は信仰より来る。信仰なきとき、真の勤勉は生まれない。生き生きしたよろこばしき勤勉は生まれない。己れを抑え、鞭撻することばかりでは続かない。生命、原動力を注ぐ泉がなければ続かない。その源泉は即ち信仰である。本当に思う、信仰のみと。

ジョン・ウェスレー曰く、

「予が凡そ22才の頃に、神は予をして只名義のみに非ずして真のクリスチャンたるべき決定を為さしめ給いたり……」

〔註：ジョン・ウェスレー（1703.6.28～1791.3.2）は、18世紀のイングランド国教会の司祭で、その後メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した人物。この運動から生じたのがメソジスト派というプロテスタント教会であり、アメリカ合衆国・ヨーロッパ、アジアで大きな勢力をもつに至った。特にアメリカではプロテスタント系で信徒数第2の教派である。聖化を強調し、『キリスト者の完全』を唱えた。これはウェスレー派のメソジストときよめを強調するホーリネスに継承されている。（ウィキペディアより）〕

僕はこれを読んで、電光に打たれるの感がした。ルッター、ウェスレー、彼等は22才にして起つ。僕も、はやからずといえども遅くない。正に今である。今である。偉人の跡を慕いて彼等の道を歩みたい。20才前後は多くの偉人の決然と志を確うしたときである。大切な時である。現代の偉人、内村先生も然りである。この間、直接に親しくお話をうかがった藤井先生もまた然りである。先生の最初の書籍上の恩師はヒルティー先生と伺って、益々ヒルティー先生が慕わしくなって来た。

僕の今日のこの燃ゆる心は誰が与えてくださったか。救主イエス・キリスト、彼御自身である。彼在まさざれば、僕のこの火は消えてしまう。彼を離れては忽焉として消えざるを得ない。すべて「彼」に依りて、である。かかるが故に、すべて「彼」のためにである。アーメン。

○1925年7月25日（土）

晴。平口様に久しぶりでお目にかかる。談、信仰のことに及ぶ。平口様、「日くれて路遠しの感あり」と云われる。若き年（17才）に洗礼は受けたが、基督教が身につかず、儒教の方が勝れると思い、基督教は全く外形的に存して時々強いられて読むにすぎなかった（聖書）。それが全く別物となって、根本の根本が基督教なることの本当にわかったこの頃の如何に幸なるか、また一方に時機の遅かりしを感じて居られた。基督教が沁みこんでからの平口様は一変されたことを僕も見る。

蛇蝎視、嫌厭する基督教が、真理を追求する人には必ず終局に於て最も大なる真理として来るは、否むべからざる事実である。第一に、聖パウロが然りである。何故にかくも真理なるか、力あるか。体験する人ぞ知る、である。これを、疑心を抱いたり、批判の眼を持ったりして、基督教を頭から解せんとする人に、如何に説明したってわかりっこはないのである。無駄の無駄である。真の基督教は真心を以て求めて已まざる人にのみ来るのである。深みへ導くのである。

平口様、感謝の生活に入られたこと感謝するのであるが（僕も）、若し僕をして更にのぞましめば、平口しげ子様が更に一段深き贖罪、復活の基督の信仰に入られんことである。主、基督は生きて我と共に在ます、という信仰である。

吉原叔母様がこの間中の御礼に来られた。一家が本当にこの度の家でお世話してあげたことに対して感謝して下さり、あまりに御丁寧なお言なので恐縮している。○○町の不親切を思えば、それは家は親切であろう。しかしこれは最も普通なことである。ただ我々は神のよろこび給い、よしとし給うことをなしたにすぎないのである。

「病める時に見舞い、渇けるものに一杯の水を与うはこれ我になしたるなり」

との主の御言に従って我々は生きたいのである。神様が我々を用いたまいて、病気でお困りの吉原の敬ちゃん、貞子様を家に二週間ほど宿めてあげたにすぎないのである。我々の

親切ではないのである。神の聖旨であったのである。

僕に於ては少なくも、人生はかかるものと信じたいのである。人生はいかなる小よりいかなる大に至るまで、人の功績と思っては間違いである。神が人をして聖旨をなさしめ給うそのことなのである。そこに人の考が入ったならば、それはすでに動機に於て不純である。故にそれは一般人は善行としても、基督の眼よりし善行でないのである。故に僕は飽くまで信仰第一である。あえて虚偽の善行をなすよりは、罪をおかす。それは信仰がまだ足りないからである。僕の信仰が強烈な時に於て、僕は善行をなさざんらんとするも得ない。硬き信仰、善行に歩まんとするときに勿論、努力を要する。しかしこの努力は、善行のための善行の努力ではない。信仰に於ての善行をなさんとの努力である。根本を信仰におくとき――不完全、不純の僕は――屡々（しばしば）、外形の善行によりて信仰の大切なることを益々思わせられる。善行をなして、実は善行でないことを思うときに、淋しみを感じ、信仰のために天を仰ぐ。

内村先生、

「信仰生活は努力の一面あるは止むを得ない。努力の止む時は生命の絶ゆる時であって、信仰其物の止む時である。真個の平安は戦闘中の平安であるとは矛盾多き人生の否むべからざる事実である。……茲（ここ）に信頼が必要である。何人も真剣に人生に面して此の信頼が起こらざるを得ない。」

「聖霊自ら言い難きの慨嘆を以て我等の為に祈りぬ」（ローマ書8章）

○1925年7月26日（日）

曇。この家の座敷には、「イエス・キリストの幼き画像」と「聖者がパイプオルガンを弾いているところへ天使が降りて来る画」とがかけてある。今日はこれを仰ぎながら、聖日の午前を過ごした。母上様が教会へ連れて行ってくれないかと言われたのに、僕は「嫌（いや）」と云っておことわりした。兄上がために行かれた。僕は母上のこの要求に対して本当に悪いことをした。否、言いつつあるを自覚しながら、尚も厭（いや）と云った。しかし一方に僕は理由を持っていた。それは異なれる信仰の人からのお話は、僕に聴き得ないと思ったからである。否、殆ど罪とまで思ったからである。それは僕に益なしと思ったからである。僕の師は、敬愛の師は内村、藤井、畔上、塚本、佐藤繁彦、定吉先生等である。それでもやっぱり、僕はわるかったようである。僕は偏することを欲しない。所謂党派心は大嫌いである。故に、僕は富永先生をかれこれ言いたくない。

ただ僕は自分の旗幟（きし）の鮮明をけがされんことをおそれる。僕は独りで送った。そして傍ら、佐藤繁彦先生著『聖（サヴ）サンダル・シング』を読んで、僕も感激に打たれた。むしろ霊感に打たれた。確信が閃いた。強くされた。キリストは益々近く在まし給うた。人の最も深き訴えは基督教によって全く聴き入れられる。パウロの実感。サゾウ・サンダル・シングの実感。

何と力強き体験ではないか。著者、佐藤繁彦先生がまた燃ゆる信仰の人なるが故に、僕は一言一句、身に沁みて読んだ。僕も至って浅薄ながら、この貴き体験の一端を自分の経験によって知る故に本当に有難かった。僕もかく救われつつあるからには、もうなんにしたってキリスト・イエス様を忘れたり、離れたりすることは出来ない。死に至るまで、死んでもなお永遠に主のもの。

ああ、有難いこととてこんなことが世にあるか。すべての宝は僕には要さない。キリスト御自身に愛されるのが最大の宝である。十字架を負う人の、深刻な愛の真理の探求は一般の人には到底わからない。それだから十字架なのである。

「世に剣をくださんがため」「十字架を負いて我に従わんがため」

との主の御言は本当に意味が深く、有難い。

内村先生の御言、藤井先生の御言、それは僕の力の泉。キリストの勇ましき僕として僕は起たざるを如何としても得ざるに至った。１９２５年7月26日、夜。

○１９２５年7月27日（月）

半晴。一人の生涯は真理の一点を護るに過ぎず、而もその任にあたり、能く其命を全うする者は福なり。――内村先生。事をなす一瞬時にあたり、その時、然り！否！と決してなす。ああこれは本当に大切なことである。

僕は東京の町を歩くとき、多くの人に接する。そして彼等の行動、言語を察して、また、その社会状態を観察して、人霊救済のために起たんとする我の、半ば失望の感をそそられるのは涙である。彼等に何を尽くしても目覚めそうもない。人のためと思うときに失望する。神の命じ給うところ、我が、神よりとらえられたる所なるが故に、神の義を説かんと起つときに絶大の勇、我に在り。神、我と共にあり。神なくば我無し。神、なすに非ざれば、我なす能わず。僕はこれからだけれども、僕にこの確信が聖霊によりて与えられている。僕も随分、神秘的な人間だと思った。ダンテの新生を読んで、或る力のある夢をみた。

今日、信州田沢温泉なる武田叔父、叔母様に小包を送る。パンとバターを。東京の人と温泉の人とを思ったときにドウカと思ったが、親切はすべしと思って快く送ることにした。上野駅の鉄道便で。約1時間またされた。その間、読みさしの宗教書を読んでキリストについて学んだ。あたりに居る小僧や、駅員やに説教したい様に思った。

佐伯様ではまたお生まれで、その名を誠道と云う。ミキ子様、出て来られた。久しぶりであった。吾妻様に寄らなかったのは悪かった。夜、神楽坂で Myth of Greece & Rome〔ギリシヤとローマの神話〕を買った。そのため蟇口（がまぐち）は空（から）っぽになった。しかし欲しい本となったら、この頃は大分、英断速決。なくなれば、あるときまで待つまでである。僕は相変わらず罪人の罪人である。しかし、ルッターの言う

「大胆に罪をおかせ、しかし、更に大胆にキリストを信ぜよ」

と云うことが、幾分なりとも明らかにわかって来たことは感謝に堪えない。サゾウ・サンダル・シングの様に徹底したい。

○1925年7月28日（火）

晴。聖サンダル・シングSt. Sundar Singh、彼の伝道生活の話より、実行的方面を深く教えられて、僕の毎日の行動が恥ずかしくなった。何故に基督者と云いて、基督者らしくならぬか。この不信の者よ！　テニスだの何だのかだのと云う運動熱も、僕には感興をそそらない。僕には、もう一般の僕の同輩の人々の楽しみとしたり、問題としたりすることが、関心事でなくなった。僕には大切な使命がある。この使命は本当に不思議に僕をとらえ始めた。僕はこれを忘れることが出来なくなって来た。僕はやがて、すべての人が指さすあわれな者になるだろうと思う。しかし僕はかまわない。基督と基督の者（極少数の）が僕を解して下さるから、僕は何もおそろしいことはない。

「基督のために苦しむが如く幸福である」

とのサンダル・シングの確信もやがて僕に本当に体験されることであろう。僕の全霊はこの一事に向かって呼ぶ。基督に倣いて、基督に従いて、基督のために。

沼津行き、国府津行き、こんなことは問題でない。世の智者、賢者、長上の者、すべての外形的のものは、僕をおさえることは出来ない。僕は性来、最も気の弱い人間に属する。しかし、神は捉え給いて、人によらず、基督によりて最も気の強い人間に属せしめ給うた。かかる内的変化は僕の知り得た最大の奇蹟である。

生ける基督、我等と共に在ます。ただこのことがこれをなした。これは本当に驚くべき事実である。これを断言し得るだけで、僕は最大の恩恵に浴したのである。僕は何にも要らない。本当にこの世は何にも要らないところである。ただ良心ばかりが要るところである。こんな歓喜と恩恵の宇宙に居て、なぜ人は苦しんでいるのだかわからなくなる。

今日、平口様に所要ありて行く。談、信仰のことに及び、共に神を讃えた。武田へ行った。宣ちゃんが帰って来ていて、久しぶりで話した。

長兄の懐かしき本箱の最下段は『聖書の研究』誌で充満している。この世の宝は、聖書と、聖霊によって導かれて書かれたる書である。これも天国に繋がれるものである。だからこの世の真の宝は、ありようはずがない。皆、空の空である。

Andromeda〔アンドロメダ銀河〕、Cassiopeia〔カシオペア座〕、Pegasus〔ペガサス座〕、Aquarius〔水瓶座〕、Capricornus〔やぎ座〕、Polaris〔北極星〕、Ursa minor〔こぐま座〕、Ursa major〔おおぐま座〕、Draco〔りゅう座〕、Cygnus〔はくちょう座〕、Aquila〔みずがめ座〕、Lyra〔こと座〕、Sagittarius〔いて座〕、Scorpio〔さそり座〕、Ophinchus〔へびつかい座〕、Serpens〔へび座〕、Hercules〔ヘルクレス座〕、Libra〔てんびん座〕、Corona borealis〔かんむり座〕、Canes venatici〔りょうけん座〕、Cepheus〔ケフェウス座〕、是等20 Constellations〔星座〕

は今晩、物干の上で望み見たものである。半月、西天に落ちなんとする夜の10時30分頃であった。この外に、輝星を一つ見た。それは懐かしきVenus〔金星〕であった。Sagittarius〔いて座〕の上に輝いていた。

○1925年7月29日（水）

晴。午前8時起床。黙示録朗読、第16章まで読む。驚くべき黙示。午前、少々読書。リンゴ餅という秋田の名産をいただく。

午後、中渋谷の高島様に参上。かよ子様、厳様にお眼にかかる。伯母様の御霊前へお供えした。藤井先生のお宅に参上。兄上の僕に関する書翰を若しやといただきに上った。突然で先生も捜してなく、大変失礼した。

山本へ行く。姉上、富美ちゃん、おたふく風邪で少々御不便。保兄上、義雄さん、隆さんの3人は社員2人と共に仙台へ旅立たる。お手伝いをする。姉上と富美ちゃんと二人きりのこされて可哀そうだったが、荷物が多いので駅へ行かざるを得ず。上野駅は大変な人ごみであった。10時発車。上野の山へ登って、東京市を眼前に見て、天を仰ぎて、東京の市民のために簡単なれど、厚き祈りを捧げた。

主よ、私を不浄より離れさせ給え。東京市民の心を天へ向けさせ給え。我が救主よ、願わくはこの切実なる祈りを聴こしめし給え。アーメン。

ただこれだけであったが、僕の眼は潤うて全市のキラキラする電灯がボーッとした。僕は本当に段を下るのさえけがらわしき思いがした。やがて車中の人となった。往来の人々、上野駅の人々、車中の人々、すべてが不浄の人々であった。すべて虚栄の人々であった。すべて貪婪（どんらん）の人々であった。僕の眼は光らざるを得なかった。僕はどうしても僕の使命の重大を知らざるを得なかった。

豈、東京市民のみならんやであった。日本も世界も此くある。僕は人類のもの、故に人類により、人類のため、である。僕に古今東西に偉人の友を有す。此等忠実なるキリストの僕を友とするは人類により、である。彼等と共にキリストの福音のためは、人類のためである。昼出でて、夜帰宅するまでの車中にて。

『真理と生命』（米国アマスト大学前総長シイリー先生著、聖書研究者訳、大正4年6月17日発行）を読む。多くの基督者は不幸にして、正ならざる道より基督教に入った。また入りつつある。故に彼等は真の基督者となり得ない。彼等はニセものである。真の生命を得ていない。何と基督教は変なものになっているではないか。ナザレのイエス様は決して決してそんなことを示されたのではない。僕は、基督教はそんなものではないんである。心から言い得る。どんな外国宣教師が来たって、僕よりどれほど聖書知識、神学知識が秀れて居ようと、僕は、彼等から基督教を聞く必要は寸毫もない。彼等は害である（どんなとは一般に強く言ったにすぎなく、そのシイリー先生の如き人々の多くあることも信ず）。

内村先生が恐らく、青山会館で説かれたであろう。基督教は外国人の手によってどうこうされるものでは決してなく、日本人は日本人として直接にイエスのよろこび給う神の子となり得ることを。僕は幸にして、内村先生から基督教をうかがった。それは僕の内なるものの要求に最もピリッと電光の如く感じた。即ち僕は、教会のナマヌルな、因習的、伝統的、形式的、外形的基督教、聖書知識、讃美歌合唱の様なものを殆ど全く知らずして、直接、イエスの懐へ投じた。疑はすべてこれを『聖書の研究』誌、内村先生の著書に持って行った。テキパキとそれは解かれた。先生の人格と講演に接して、イエス様の香をうかがい得て、益々基督教の力、愛を知って来た。それはすべて自分の体験によりて益々明らかとなり、イエス様の教え、イエス様のよろこび給うことの何たるかが益々明らかとなってきた。それは所謂基督教とは相容れざるものであることも明らかである。真の基督教はこれからの世の中には益々わからぬものとなって行くだろう。原始の使徒パウロの信仰は到底、これからの世の人には解せられず、信ぜられず、縁の遠いものとなるであろう。しかし、永遠に動かすべからざる最大の真理なる故に、これは永遠に少数の人ではあろうが、確実に確実に保たれ、説かれて行くのである。そして、キリストの救は世々限りなく行われて行くのである。

僕は確かに選ばれたる一人であることを聖霊によりて告げられている。何がどうなろうと、この真理とこの生命とは永遠に存するものである。故に僕はこれに僕を全然浸らせてこの中に生くるを以て、何よりの関心事となす。これより強い意志は他にない。世界のあらゆる権力者、富者、学者を集めて僕を脅かすとも、僕はただ一人、救主なるイエス・キリスト在まし給うが故に、頑として動かざるものである。故に、黙示録にあの驚くべき記事がある。あれを笑うものは信仰の大なるものではないのである。ここに於て、僕は己れの義務に直進しよう。

今日、中野駅付近にて小学校時代の旧友に遭う。彼女の眼と僕の眼とは期せずして会った。その眼にはややイブカシゲなところがあった。僕が変わっているので昔を思い出だし得なかったかの如くであった。僕は、彼女が彼女であることを知る位、鋭敏であった。勿論、会釈はしなかった。彼女が若しや現代的女に変わってはしないかと、その容姿を一瞥したとき思われたのは残念なことであった。ただその然らざらんことをのみのぞむ。

現代の女の外貌にとらわれ、虚飾に流れて行くことの甚だしいことは一大悪特色である。彼等が外にかくなり行けば行くほど、内的に空虚、邪悪になり行くは自明のことである。禍なる哉、大なるバビロン、亡びに行くバビロン。すべての亡びは内より生ず。

光り行く小さき神の器を見ずや、
力に満ち行く小さきおのこを見ずや。
鍛えられ行く小さき日本刀をみずや、
死体も新しき生命にて甦されたり。

主、キリスト宿り給いて、空なる我は力と光とに
生きたり。その源は愛なる神なり、ここに
我は愛によりてのみ主のために生くるものなり。
ああ、神よ、御恵により、生きたる神の愛の証をのみ、
この小さきつまらぬ身をも通してあらわさしめ給え。アーメン

○1925年7月30日（木）

晴。明治天皇祭。つづらの中から、政美兄上から母上へ宛ての御手紙が出てきた。すべて北京より。その中から3通、僕にあてての御手紙が見出された。その生ける言葉は今日のまた激励の言葉である。最初の高校試験に失敗した。かの励言を徒にした僕は本当に悲しかった。そして今も悲しく思う。しかし、その悲しみも一時のものであった。大なる恩恵は（はじめ、自己の罪によりて邪道に陥りしも）来った。それは新生のことであった。大正11年（1922年）の春は、勉励1年の効ありて、水戸に入学した。その成績は優秀とあった。その時は兄上はこの世には居らなかった。天国でこの報せを聞かれたのであった。

来年3月、帝大の試験を受ける準備の今日の激励の言は同じくこの書翰に在る。この度はその空しからざらんために必死の努力をなす覚悟である。

大正9年（1920年）12月10日の書翰より、

「計画を立ててしっかりやって下さい。怖がっちゃあだめ。」

大正10年（1921年）1月5日の書翰より、

「辰さん、勉強の具合は如何。ここがふんばり所。5年間の勉強（3年間の勉強）を美事にくくって御覧。しっかりやって皆をよろこばせて下さい。」

大正10年（1921年）1月23日の書翰より、

「学校に於ける風評即ち同級生の説に耳を傾くる事は全然御無用と存し候。少なくとも、之に辰さんのみにて直接に独断に批評を下し其れに従って行動する事はお謹み下されたく、至当と考えらるる事も一応皆様の御意見伺ってからの事となされ度候。準備のため時間が不足云々の件は僕には聊か不明。時間の不足は熱心を以て注意の集中を以て補わるるこそ至当と存候え。……優れたる指導者がある間は信じて凡てを委ぬるが弟子の道であり、又男の雄々しきに有之候。自分より出すのみ計画致すのみが勇気には有之候わず。やがてほしくとも指導者なき時も参り候ふ可し。其の時こそ熟慮の上、御自身御決行の時に御座候。高等学校が其の時代に御座候。今は母上様始め皆々様の御指導第一に致すが何よりのことに候。……問題は実力のみに候。5年前の辰さんの勉強思い出され、今度もしっかり願上候。匆々。

1月23日

政美

辰雄様

」

兄上の愛の励言である。謹んでこれを今日更に深く承る。今日、初めて兄上の日誌を拝見することをゆるされ、静かにその一節を読んだ。兄上の日誌の中に僕を見出だすを得たこの喜びは絶大である。そして、更に深き貞節の基督教を教えられた。それは人格のあらわれであった。また、本当に一字も読まない先から、兄上の言われることが僕にしみ込んで来る様に感じるのは不思議である。同じく聖霊に導かれて書くところには、暗合の語調がある。兄の祈りをそのまま、僕の祈りとすることが出来る。勿論、兄の信仰は僕のそれ以上であるから、否むしろ、兄上の純正は僕の及ぶところでないから、更に深くあるが、尚そこに、僕はよろこばしき一致を視る。僕は、彼の日誌を読んで教えられ、励まされ、叱られることが多くあろう。これは僕の最良書の一つである。僕と霊交ある兄上の生ける言葉である。兄上が夜晩く日誌を一心に書いて居られた同心町時代が眼前に髣髴とする。

己れの利害をすてて、潔くただ神のヨシとし給うところなる様に、寸毫の自己の考えをも容れずして、事を断行してあやまることはない。これも昨日一小事にて実感した有難き恩恵であった。

一日の仕事は次の順序に従うをよしとす。日々ナスベキ事。

1. 新約聖書　起床して第一に。
2. 独乙語　午前。
3. 英語　午後。
4. 宗教書類、読書　夕、晩。
5. 書翰、日記　夜、午後9時祈祷。
6. 旧約聖書　就床の前。

夜、宣ちゃん来り、神楽坂散歩をなす。私にとりては好ましきことには非ざりき。そはこの世の人の所謂快となすことが皆我が心を淋しくする所以なればなり。

8月は来らんとす。7月逝きなんとす。我は涙なり。我は血なり。我は鉄なり。我は火なり。我は世と容れず。我は厳然と起つ。我は睨む。而も我は泣く。我は祈る。我は狂えるか。然らず、我は眼覚めてあり。我は生きてあり。再び言う。世は我と反す。我は世と反す。我はキリストに従い、キリストに望みをおくものなる故に、我はこの世に在りては最もあわれむべき人間なり。我は之を覚悟す。神、我にこの道を選び給いしにより、我は勇みてこの道を歩まん。我がなすことすべてが空ならずと信ずる故に、何ものが来るとも恐れなし。

ああ、わが救主よ、わがこの切なる主に対する信頼を願わくは死に至るまで保たしめ給え。アーメン。

今朝、ヨハネ黙示録を読了す。夜、Sadhu Sundar Singh〔サドゥ・サンダル・シング〕の“At the Master's feet”〔主のみ足の許に〕金井為一郎氏訳を読了。政美兄上の日誌中より驚くべき文字を発見して、全く深き祈祷に陥り、父なる神、救主なる独子キリスト、聖霊の力にて強くせられ、絶大の力の中に就床せんとす。明朝の輝きや如何ばかりならん。聖霊来り

給え、能き給え、導き給え。アーメン。

○1925年7月31日（金）

晴。午前10時出掛けて山本へ行く。姉上、富美ちゃんの二人をお見舞いに。オタフクカゼかなり経過よく安心した。仙台へ出掛けた3人の御留守居である。お昼を3人で戴く。氷を買って来て、リンゴシロップを入れて戴く。氷を呑む位の元気が出てきたこの頃の身体は本当に感謝している。しかし、氷は習慣となるから、よくよくでなければ飲まないつもり。二人と別れて3時半帰る。

突然、沼津行きを決して、龍二兄上と仕方をする。兄上と二人で夏を送るというのは生まれて初めてである。平口様、御留守居に来て下さる。母上と子供と3人で8月の上旬をおくられるわけである。実様が夜来られる。実様だけは敬愛の友である。